住吉如慶・具慶によるやまと絵制作について
—画題の傾向を中心に—

下　原　美　保*

（2008年10月30日　受理）

The Production of *Yamato-e* by *Sumiyoshi Jyokei* and *Gukei*: Consideration of Motifs

SHIMOHARA Miho

要約

本論は寛文3年に土佐派から分派した住吉派、特に、初代如慶と具慶のやまと絵的画題に着目した考察である。

かれらの手がけた画題は従来からの歌絵や物語絵、行事絵が大部分を占めていた。これらは狩野派や土佐派でも制作され、揃い物の歌仙絵や古典物語絵は大名家の輿入道具に供されることも多かった。ただし、従来からの画題において新たな創作も見出せた。例えば、具慶の源氏絵の場合、四季絵の伝統を踏まえた作品や、ある段落のみを取り上げ和歌を配した作品なども見られ、他流派との差異化がなされていた。また、如慶の歌絵では、武家歌仙や蟲歌合など当世に成立した全く新しい画題も確認された。

軍記物も如慶を中心に数多く手がけられ、第6回贈朝屏風制作でも狩野派と並んで三双の武者絵を制作している。また、同派では御伽草子も度々その画題としてとり上げられている。軍記物や御伽草子は慶長期から元和・寛永期にかけて大量に刊行されており、享受層も前代と比べ急激に拡大していた。同派は新興の流派であるがゆえに、このような動向にもいち早く対応したと考えられる。

キーワード：住吉如慶・住吉具慶・近世やまと絵・軍記物・御伽草子

*　鹿児島大学教育学部　准教授

はじめに

住吉派は、初代如慶によって寛文3年（1663）に設立され、江戸時代においては新興の流派ということができる。同派が興隆した江戸時代初期は、狩野派において幕府の御用絵師体制を盤石にした探幽や、土佐派を宮廷絵所預職に復帰させた光起など、各流派の方向性を決める重要な絵師が輩出している。このような時期に、なぜ、住吉派という新たな流派が設立される必要があったのであろうか。これまでの先行研究では、同派が門徒であった天台宗の人脈を通じ、幕府の御用絵師に就任したこと、(注1) また、その背景には、後水尾天皇を中心とした王朝文化復興の気運が追い風になったことなどが指摘されてきた (注2)。しかしながら、かれらが具体的には何を求められ、どのような需要に応えて制作活動を行ってきたのかについては、御用絵師就任の契機となった如慶による東照宮縁起絵巻諸本の制作や、具慶による「元三大師縁起絵巻」、同「慈眼大師縁起絵巻」等を除き、未だ充分に検討されているとはいえない。そこで、本論では、かれらの手掛けた画題、特に、同派興隆期に数多く、そして幅広く手掛けられたやまと絵的画題に注目してみたい。この時代は、やまと絵をお家芸としてきた土佐派はもとより、狩野派やその他の流派に至るまで広くやまと絵的画題が手掛けられていた。これらの制作は、土佐派においては光起による同派再興のきっかけともなり、狩野派においては絵画制作のさらなる需要拡大につながったと考えられる。住吉派設立時に同派が手掛けたやまと絵的画題の傾向と、これらの流派、特に住吉派の母胎となった土佐派や、従来からの幕府の御用絵師である狩野派との比較を行うこととは、同派が既存の流派とは異なる新機軸をいかに模索してきたのかを探ることにもなるだろう。

そこで、まずは、住吉如慶・具慶父子のやまと絵的画題の作品を可能な限り集めることとする。その際、粉本類（下絵・画稿）はもとより、現在では所在不明な作品（売立目録掲載作品等）、史料等の記事（『住吉家旧記』、『住吉家鑑定控』、『倭錦』等）によって確認される作品も対象とする。

また、本論では、如慶、具慶の真筆と認められた作品に限らず、明らかに画風の異なる作品を除き、同派工房作と推測される作品も含めて考察したい。なぜなら、同派は数多くの歌絵や物語絵、しかも画面数の多い三十六歌仙絵や源氏物語絵などを手掛けており、個人制作ではその需要に追いつけなかったと推測されるからである。現在、確認できる範囲でも、具慶には蜂谷慶賀廣通、松原慶茂、戸田廣重などの弟子がいたことがわかっており (注3)、かれらが如慶、具慶父子の作品制作に関わった可能性も高い。これらの作品については、「伝如慶筆」あるいは「伝具慶筆」という表記を行うこととする。

ここで、本論で注目するやまと絵的画題を定義づけする前に、「やまと絵」ということばを再確認しておきたい。

周知のように、やまと絵は時代によって定義が異なる。平安時代においては、日本の風景や風俗を描いた画題上のことばであった。しかし、鎌倉時代に入ると中国から宋元の水墨画が輸入され、その新たな様式で日本的画題が描かれるようになる。そこで、やまと絵の定義も、水墨画の

対概念、つまり、平安時代から継承されてきた伝統的な絵画様式を指すようになる。また、室町時代に土佐派が宮廷の絵所預を世襲するようになると、同派の手掛けた絵画が、やまと絵を特徴づけることばになり、江戸時代に入ると、流派による画題の描き分けさえ、さほど明確でなくなってくる。このように、やまと絵を一言で定義することは困難であり、現在までにこれらを包括的に表す言葉も不在である。そこで筆者は、平成５年10月に開催された「やまと絵－雅の系譜－」展で松原茂氏が定義された「王朝絵画の伝統を受け継ぐもの」（注４）とする説に賛同し、ひとまず論を進めることとする。

よって、本論で対象とするやまと絵的画題は、１歌絵、２物語絵－古典的物語・軍記物・御伽草子・随筆・説話－、３景物・花鳥画、４行事絵とする。これらの一覧が、表１「住吉如慶及び伝如慶のやまと絵作品」と表２「住吉具慶及び伝具慶のやまと絵作品」である。尚、(　) で括った題名の作品は、文字情報のみ確認できる作品を指すこととする。

【表１　住吉如慶および伝如慶のやまと絵作品】

	ジャンル		作品名	員数	所蔵者名	制作年	備考
1 - 1	歌絵		三十六歌仙絵扁額	三十六面	久能山東照宮	不祥	
1 - 2			三十六歌仙図屏風	六曲一双	高津古文化会館	不祥	
1 - 3			三十六歌仙図	一帖	ボストン美術館	不祥	・伝如慶筆・住吉広守、土佐光輔との合作
1 - 4			三十六歌仙帖	一帖	不詳（旧　中山家）	不祥	・昭和３年４月の中山家売立目録
1 - 5			三十六歌仙絵巻	一巻	不詳（旧　高橋男爵家）	不祥	・大正６年10月の高橋家売立目録
1 - 6			(百人一首)	(不祥)	(不詳)	(不祥)	・『住吉家旧記』に記事掲載
1 - 7			(古歌仙)	(不祥)	(不詳)	(不祥)	・『住吉家旧記』に記事掲載
1 - 8			(中古歌仙)	(不祥)	(不詳)	(不祥)	・『住吉家旧記』に記事掲載
1 - 9			(新歌仙)	(不祥)	(不詳)	(不祥)	・『住吉家旧記』に記事掲載
1 - 10			(武家歌仙)	(不祥)	(不詳)	(不祥)	・『住吉家旧記』に記事掲載
1 - 11			小色紙（斎宮女御）	一枚	不祥（旧　三崎あるいは某家）	不祥	・大正15年11月の三崎家・某家の売立目録
1 - 12			赤染衛門図	一幅	不詳	寛文元年～同10年(1661-1670)	・『国華』594号に掲載
1 - 13			草子洗小町	一幅	個人蔵	不詳	
1 - 14			小町図	一幅	不詳（旧　井伊子爵家あるいは前田子爵家）	不祥	・井伊・前田子爵家売立目録（開催年不明）
1 - 15			(後鳥羽院・俊成聟)	(不祥)	(不詳)	(不詳)	・「住吉家鑑定控」に記事掲載
1 - 16			(定家・家隆之図)	(不祥)	(不詳)	(不詳)	・「住吉家鑑定控」に記事掲載
1 - 17			住吉家粉本・歌仙図其他下絵	一巻	東京芸術大学	不詳	・住吉如慶・具慶の歌仙絵の下絵
1 - 18	物語絵	古典的物語	蟲歌合絵巻	一巻	個人蔵（旧　末松青萍）	寛永17年（1640）	・大正８年５月の末松家売立目録
1 - 19			源氏物語画帖	一帖	サントリー美術館（旧　高橋男爵家）	不詳	・昭和３年３月の高橋家売立目録
1 - 20			源氏物語画帖	一帖	大英図書館	寛永３年～寛永６年(1663-1666)	
1 - 21			源氏物語画帖	一帖	白鶴美術館	不詳	・伝如慶筆（守住貫魚の極書あり）
1 - 22			源氏物語扇面画帖	一帖	九曜文庫	不詳	・伝如慶筆・東京芸術大学に「住吉内記」による如慶筆源氏物語扇面画の写し有り
1 - 23			源氏物語扇面画帖	一帖	チェスター・ビーティ・ライブラリー	不詳	・伝如慶筆
1 - 24			源氏物語手鑑	不祥	不祥（旧　徳川家）		・昭和２年４月の徳川家売立目録
1 - 25			源氏物語	一帖	不詳（旧　赤星家）	不詳	・大正６年10月の赤星家売立目録
1 - 26			源氏扇面絵	一幅	不祥（旧　清野家・林家）		・昭和２年３月の清野家・林家の売立目録
1 - 27			源氏物語	二幅	不詳(旧　赤星家・下條桂谷)		・大正12年６月の下條桂谷の売立目録
1 - 28			(源氏押画屏風)	(一双)	(不祥)（旧　松平越中守）	(不詳)	・「住吉家鑑定控」に記事掲載
1 - 29			(源氏真墨絵)	(五十四葉)	(不詳)	(不詳)	・「住吉家鑑定控」に記事掲載
1 - 30			伊勢物語絵巻	六巻	東京国立博物館	寛文３年（1663）	・延宝４年10月21日に徳川家綱の正室であった高厳院の御遺物として津軽信寿が拝領

	ジャンル		作品名	員数	所蔵者名	制作年	備考
1 - 31	物語絵	古典的物語	伊勢物語図	九葉	大英博物館	寛文元年～同10年（1661-1670）	
1 - 32			堀河殿夜討絵巻	二巻	東京国立博物館	不詳	・「住吉家粉本類」に画稿が存在
1 - 33		軍記物	木曽物語絵巻	三巻	出光美術館	不詳	
1 - 34			曽我物語絵巻	二巻	不祥（旧　子爵家）	不詳	・伝如慶筆・大正2年11月の旧子爵家売立目録・『倭錦』に記事掲載　・東京芸術大学に如慶の下絵有り
1 - 35			平家物語屏風（写）	一巻	東京芸術大学	不祥	・廣夏による如慶筆「平家物語図屏風」の写し
1 - 36			義経図	一幅	不祥（旧　冷泉子爵某家）	不詳	・大正7年11月の冷泉子爵家売立目録
1 - 37			（碁盤忠信図屏風）	（一双）	（不詳）	明暦元年（1655）	・第6回贈朝屏風・『通航一覧』に記事掲載
1 - 38			（那須与一図屏風）	（一双）	（不詳）	明暦元年（1655）	・第6回贈朝屏風・『通航一覧』等に記事掲載
1 - 39			（和田合戦図屏風）	（一双）	（不詳）	明暦元年（1655）	・第6回贈朝屏風・『通航一覧』等に記事掲載
1 - 40			（三韓退治）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『倭錦』に記事掲載
1 - 41			（義経記）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『倭錦』に記事掲載
1 - 42		御伽草子	竹取物語絵巻	三巻	東京大学文学部国文学研究室	慶安2年（1650）	・伝如慶・具慶筆
1 - 43			宇治橋姫物語絵巻	一巻	東京国立博物館	不詳	
1 - 44			狭衣物語絵巻	五葉	東京国立博物館	不詳	・伝如慶筆
1 - 45			狭衣物語　（下絵）	六葉	都立中央図書館（加賀文庫）	不詳	
1 - 46			きりぎりす物語絵巻	二巻	細見美術館	寛文元年～同10年（1661-1670）	
1 - 47			彦火々出見尊絵巻　（下絵）	一巻	東京芸術大学	不詳	
1 - 48			（廿四孝巻物）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『倭錦』に記事掲載
1 - 49			（奈世竹物語）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『倭錦』に記事掲載
1 - 50			（天若彦草子）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『倭錦』に記事掲載
1 - 51			（夢物語）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『倭錦』に記事掲載
1 - 52		説話・随筆	（宇治拾遺）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『倭錦』に記事掲載
1 - 53			徒然草絵巻	三巻	金沢文庫	不詳	・飯塚円貞が伝如慶筆「徒然草図」を明和8年（1771）に模写したもの
1 - 54			徒然草図屏風	六曲一双	個人蔵	不詳	・伝如慶筆
1 - 55	花鳥・景物図		四季山水図座屏	二曲一双	相国寺承天閣美術館	不詳	
1 - 56			秋草図屏風	六曲一双	大倉集古館	不詳	
1 - 57			花籠図（小襖絵）	四面	妙法院	不詳	
1 - 58			小禽図ほか（大書院一の間小襖絵）	四面	鹿苑寺	不詳	
1 - 59			小禽図ほか（大書院四の間小襖絵）	四面	鹿苑寺	不詳	
1 - 60			立華図　ほか（杉戸絵）	六面	恵観公山荘止観亭	不詳	
1 - 61			（絵まりの図）（寛永度内裏造営　御記録所西より二の間）	（不祥）	（京都御所）	寛永18年～19年（1641-1642）	
1 - 62			（梅図）（承応度内裏造営　内侍所）	（不祥）	（京都御所）	承応2年～3年（1653-1654）	
1 - 63			（高欄に菊図）（承応度内裏造営　御学問所南ノ方西の杉戸）	（不祥）	（京都御所）	承応2年～3年（1653-1654）	
1 - 64	行事絵		年中行事図屏風	六曲一双	東京国立博物館	不祥	

注

＊売立目録については、東京文化財研究所の住吉派作品関連写真と「研究資料　全国売立目録所在一覧〈東京国立文化財研究所・東京国立博物館・東京芸術大学所蔵目録編（一）〉」（都守淳夫・中村節子『美術研究』第360号　平成6年10月30日　便利堂）、「同（二）」（『　同　』第361号　平成7年3月20日　便利堂）を参考にした。

＊売立目録の画像でのみ確認できる作品については、画像不鮮明のため作者の判断は困難であるが、明らかに異なるものを除いては、如慶あるいは伝如慶作品（工房作品も含む）の可能性を考慮し、本論では考察の対象とする。

＊作品のタイトルは、所蔵者が使用する名称、あるいは掲載文献に記載されたものを使用した。

＊以上、表2も同じ。

【表２　住吉具慶及び伝具慶のやまと絵作品】

	ジャンル		作品名	員数	所蔵者名	制作年	備考
2 - 1	歌絵		百人一首画帖	一帖	個人蔵	～寛文 10 年（1670）	・見返し絵のみ如慶筆
2 - 2			三十六歌仙画帖	一帖	板橋区立美術館	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 3			三十六歌仙画帖	一帖	斎宮歴史博物館	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 4			三十六歌仙画帖	一帖	M&A パーク財団	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	・一橋徳川家伝来
2 - 5			三十六歌仙画帖	一帖	個人蔵	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 6			三十六歌仙画帖	一帖	チェスター・ビーティ・ライブラリー	不詳	
2 - 7			三十六歌仙式紙貼付幅	四幅	月照寺	不詳	
2 - 8			中古三十六歌仙画帖	一帖	個人蔵	不詳	
2 - 9			時代不同歌合（百五十番）	一帖	靜嘉堂文庫蔵	不詳	・狩野秀信（1643-1718）との合作
2 - 10			六歌仙画帖	一帖	個人蔵	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 11			女房三十六歌仙　小侍従	一幅	個人蔵	不詳	
2 - 12			富士見業平図	一幅	個人蔵	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 13			在原業平観梅図	一幅	フリア美術館	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 14			伊勢観瀑図	一枚	東京国立博物館	不祥	
2 - 15			柿本人麿像	一幅	福岡市博物館	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 16			定家卿小倉山荘観楓之図	一幅	山口蓬春記念館	不詳	
2 - 17			定家詠月次花鳥図屏風	六曲一双	高津古文化研究所	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 18			南都八景画帖	一帖	英勝寺（神奈川県）	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 19			六玉川絵巻	一巻	カリフォルニア大学景元斎コレクション	元禄 4 年～宝永 2 年（1691-1705）	
2 - 20			三夕図	三幅	個人蔵	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 21			和歌人物図巻	一巻	個人蔵	不祥	
2 - 22			（柿本人麿像）	（不祥）	（不詳）	（延宝 2 年～元禄 4 年　1674-1691）	・「住吉家鑑定控」に記事掲載
2 - 23			歌仙図其他 下絵	一巻	東京芸術大学	不詳	・住吉如慶・具慶の歌仙絵の下絵
2 - 24	物語絵	古典的物語	源氏物語絵巻	五巻	茶道文化研究所（旧　仙台伊達家）	寛文 10 年～延宝 2 年か（1670-1674）	・仙台伊達家旧蔵
2 - 25			源氏物語絵巻	一巻	個人蔵	延宝 2 年～延宝 5 年（1674-1677）	
2 - 26			源氏物語絵巻	一巻	MOA 美術館蔵	延宝 2 年～延宝 5 年（1674-1677）	
2 - 27			源氏物語絵巻	一巻	東京国立博物館（旧　千野浩一蔵）	延宝 2 年～延宝 5 年（1674-1677）	
2 - 28			源氏物語図額	十二面	個人蔵	不祥	
2 - 29			源氏物語図屏風	六曲一双	根津美術館	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 30			源氏物語　朧月夜の君図	一幅	個人蔵	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1691）	
2 - 31			伊勢物語絵詞巻	二巻	大阪青山歴史文学博物館	元禄 4 年～宝永 2 年（1691-1705）	
2 - 32			伊勢物語絵巻	一巻	個人蔵（旧　某大名家）	不詳	
2 - 33		御伽草子	竹取物語絵巻	三巻	東京大学文学部国文学研究室	慶安 2 年（1650）	・伝如慶・具慶筆
2 - 34			橋姫物語絵巻	一巻	東京国立博物館	不詳	・伝具慶筆
2 - 35			梅津長者物語絵巻 (写)	二巻	西尾市岩瀬文庫	文政 2 年（1819）に模写	・具慶作「梅津長者物語絵巻」の模写・東京国立博物館に画稿あり
2 - 36		—	物語図屏風	六曲一双	個人蔵	不祥	・伝具慶筆・画題は特定できず
2 - 37		説話・随筆	宇治拾遺物語絵巻	一巻	出光美術館	延宝 2 年～元禄 4 年（1674-1686）	
2 - 38			徒然草画帖	一帖	東京国立博物館	延宝 6 年（1678）	・飛鳥井雅章の孫娘が越前松平家へ輿入れの際に制作
2 - 39			徒然草図	一幅	江戸千家	不詳	
2 - 40			徒然草図	一幅	個人蔵	不詳	
2 - 41			徒然草図	一葉	東京国立博物館	不詳	
2 - 42			徒然草図下絵	九十六葉	斎宮歴史博物館	不詳	
2 - 43			徒然草其他下絵	二巻	東京藝術大学	不祥	
2 - 44	花鳥・景物図		観桜図屏風	六曲一隻	東京国立博物館（旧　西脇健治蔵）	元禄 4 年～宝永 2 年（1691-1705）	
2 - 45			鶉図	一幅	津観音	未詳	
2 - 46			松図（杉戸絵）	一面	青蓮院	不詳	・伝具慶作
2 - 47	行事絵		（五節之宴水屏風）	（不祥）	（不詳）	（不詳）	・『禁裏御賄頭日記抄』（『東洋美術大鑑』第五冊奥付）に記事掲載

1　歌絵

まず、やまと絵的画題の代表として、和歌や歌枕、歌仙を題材とした歌絵に注目したい。中でも、当時、数多く手掛けられたのが、複数の歌仙とその和歌が配された歌仙絵である。

如慶の真筆、あるいはその可能性が高く、なおかつ所在が明らかな作品として挙げられるのが、久能山東照宮の「三十六歌仙絵扁額」（No.1-1）と高津古文化会館の「三十六歌仙図屏風」（No.1-2）である。「三十六歌仙帖」(No1-4) と「三十六歌仙絵巻」（No.1-5）は所在不明ながら、売立目録（No.1-4 は昭和３年、No.1-5 は大正６年）に画像が掲載されている。また、『住吉家旧記』には、百人一首（No.1-6）、古歌仙（No.1-7）、中古歌仙（No.1-8）、新歌仙（No.1-9）、武家歌仙（No.1-10）が如慶作品として掲載されている。

No.1-10 の武家歌仙は作品が現存しないため推測の域を出ないが、17 世紀半ばに成立したとされる武家百人一首を指すものと考えられる。武家百人一首は平安時代から室町時代にかけての武人による和歌が採録されたもので、榊原式部大輔忠次の撰により寛文６年（1666）に刊行されている。また、寛文 12 年（1672）には菱川師宣の挿絵と東月南周の書（和歌）で再刊されており、これらは如慶存命中にすでに成立、流布していた。もし、武家歌仙が武家百人一首であれば、如慶は当世風の題材も手掛けていたことになる。また、具慶筆「和歌人物図巻」（No.2-21）も、武家百人一首の歌仙、あるいはそこから抜粋した歌仙が題材になったと考えられる作品である。その添状には平安時代から室町時代にいたる歌人や武将たちの名前、宗尊親王、実朝、西行、忠盛、仲綱、光行、行氏、忠度、泰時、尊氏らの名前が記載されている（注５）。武家百人一首の歌仙、あるいはそこから抜粋した歌仙が題材になったと考えられる作品である。

具慶が手掛けた歌仙絵としては、「三十六歌仙画帖」（No.2-2 ～ No.2-6）、「（同）式紙貼付幅」（No2-7）や「中古三十六歌仙画帖」（No.2-8）、「時代不同歌合（百五十番）」（No.2-9）、「六歌仙絵画帖」（No.2-10）、「百人一首画帖」（No.2-1）などが現存している。「時代不同歌合」（百五十番）」は狩野秀信との合作である。住吉家粉本に如慶・具慶父子の歌仙図の下絵（No.1-17・No.2-23）が多数残されているため、当時はさらに多くの歌仙絵が制作されたと推測される。

これらの歌仙は、同父子に限らず、土佐派や狩野派でも多く手掛けられた典型的な歌絵の画題である。例えば、同時代における土佐派の作品としては、光起筆「女房三十六歌仙画帖」（個人蔵）、「六歌仙図」（東京国立博物館蔵）、狩野派の作品としては探幽筆「新三十六歌仙図帖」（東京国立博物館蔵）、「三十六歌仙図扁額」（樗谿神社蔵）、「（同）」（浅間神社蔵）等が知られている。これらのほとんどは貴族や大名家の輿入れ道具等として制作されたもので、住吉派の場合も、具慶筆「三十六歌仙画帖」（No.2-4）は一橋徳川家に伝来したことがわかっており、輿入れ道具として調製された可能性が高い。

住吉派における歌仙絵でも特徴的なのは、独立した歌仙絵の存在である。このような歌仙絵は、土佐光起の「柿本人麿像」（個人蔵・ギメ美術館蔵）や「業平歌意図」（東京国立博物館蔵）、「富士見西行図」（個人蔵）等にも見いだせるが、住吉如慶・具慶父子の場合、その数もバリエー

ションもさらに豊富である。如慶の場合、『国華』や売立目録の挿図で確認できる作品として「赤染衛門図」（No.1-12）、「草子洗小町」（No.1-13）、「小町図」（No.1-14）が、「住吉家鑑定控」で記事のみ確認できる作品として「（後鳥羽院・俊成畫）」（No.1-15）、「（定家・家隆之図）」（No.1-16）などが見いだせる。

特に前二者は、やまと絵の伝統に則った引目鉤鼻の定形的歌仙絵と異なり、住吉派特有のくせのある顔貌－下ぶくれの輪郭で、目は黒目がち、鼻は鼻孔まで描き込む実人物的顔貌－をもつ歌仙絵である。「赤染衛門図」も「小町図」も檜扇を持った立ち姿で描かれ、物語の一場面を抜粋したかのような構図である。両者とも上畳に座した通常の歌仙絵とは趣が異なる。

独立した歌仙図は具慶作品の中にも多数見出せる。例えば、「女房三十六歌仙　小侍従」（No.2-11）や「富士見在原業平図」（No.2-12）、「在原業平観梅図」（No.2-13）、「伊勢観瀑図」（No.2-14）、「柿本人麿像」（No.2-15）、「　（同）　」（No.2-22）、「定家卿小倉山荘観楓之図」（No.2-16）などである。これらは、如慶同様、同派特有の人間味あふれる歌仙として描かれ、また、その構図も物語の一場面のようである。歌仙絵自体は他の流派でも制作されているが、その多くは没個性的な定形化された歌仙絵である。その中にあって住吉如慶・具慶父子の描く歌仙絵は、独立した形態、定形化を脱却した描写、物語の一場面であるかのような構図という点で、同派の歌仙絵を特徴づけているといえよう。

また、「柿本人麿像」（No.2-15）に関しては、伝統的やまと絵の描法に則り、有職故実をふまえた衣装の文様や服制で描かれたものの、顔貌は実人物のモデルが想定されるほど、写実的な表現がなされている。詳細については拙稿「住吉具慶筆〔柿本人麿像〕についての一考察－近世初期宮廷歌壇と歌仙絵制作－」（注6）でも述べたが、後水尾院を中心とした宮廷歌壇の中で制作された可能性が高い。

歌絵の中でも特に注目しておきたいのが如慶筆「蟲歌合絵巻」（No.1-18）（注7）である。本作品は木下長嘯子（勝俊　1569～1649）の蟲歌合に絵画を加えたものである。木下長嘯子は秀吉の北政所の甥で、関ヶ原の戦いの後は、松永貞徳ら文化人とも交遊していた。長嘯子は、細川幽斎に和歌の指導を受けているが、古今伝授継承者のように故実にとらわれることなく、むしろ伝統的歌学に反発していたことでも知られている。本作品は、落款より、寛永17年（1640）、つまり、長嘯子の在命中に制作されたことがわかる。その内容は、草庵に住まう一人の人物が、秋の夕べ、庭に集まる蟲を眺めていたところ、一匹のこおろぎが現れ、歌の会を開こうと提案するというものである。ひきがえるが判者となって十五番の歌合わせがはじまり、蟷螂や蝶、蝉やげじげじなど、身近な蟲が登場する。歌合という形式自体は上代からの伝統を引き継ぐものであるが、異類物歌合、例えば魚鳥平家や鴉鷺合戦物語などの流れも継承している。この蟲歌合絵は、如慶の作品ばかりでなく、江戸時代を通じて絵本や版本として数多く絵画化されていた（注8）。本作品の依頼主が誰であるかは不明であるが、如慶が従来通りの歌絵だけでなく、当世の画題も手がけていたことは留意しておきたい。

具慶の場合は、定家が詠んだ十二ヶ月花鳥の和歌を題材とした「定家詠月次花鳥歌絵」(2-17)（注9）や、歌枕や名歌を絵画化した「南都八景画帖」(No.2-18)、「六玉川絵巻」(No.2-19)、「三夕図」(No.2-20) 等を手掛けている。「南都八景画帖」は、南都の八景を詠む和歌を、「六玉川絵巻」は歌枕として名高い玉川についての和歌六首を、「三夕図」は、定家、寂蓮、西行の名歌を絵画化したものである。歌枕や有名な歌仙を選んで絵画化した揃いの歌絵は、近世に入って急激にその数を増し、土佐派はもとより、狩野派の絵師によっても数多く手掛けられる。具慶の作品は、その早い例に位置づけることができよう。

2－1）　物語絵－古典的物語－

歌絵と同じく同派で大量に制作されたのが『源氏物語』や『伊勢物語』など、古典を絵画化した作品である。特に如慶は源氏物語絵を数多く手掛けており、計11件を確認することができる。この中で、如慶筆と断定できる現存作品がサントリー美術館本（No.1-19）と大英図書館本（No.1-20）の2件であり、伝如慶作と推定される作品が白鶴美術館本（No.1-21)、九曜文庫本（No.1-22)、チェスター・ビーティー・ライブラリー本（No.1-23）の3件である。また、売立目録のみで確認できる作品がNo.1-24からNo.1-27の4件、「住吉家鑑定控」の記事に掲載されているのがNo.1-28とNo.1-29の2件である。これらの中で、源氏物語54帖分の全てが揃っている作品が（1帖につき1場面×54帖分)、No. 1-19、1-20、1-22の3件であり、No.1-21は桐壺から野分までの28場面が残っている。これらのことから、如慶工房における源氏絵制作の占める割合は非情に大きかったと推測される。

具慶が制作した源氏物語絵としては、絵巻が4件（No.2-24 ～ No.2-27)、現在額装されている作品が1件（No.2-28)、屏風が1件（No.2-29)、掛幅が1件（No.2-30）の計7件である。如慶筆あるいは伝如慶筆の源氏物語絵の多くが54帖分を備えていたのに対し、具慶の源氏物語絵はNo.2-24を除き、部分的に場面を抽出した作品がほとんどである。例えば、根津美術館所蔵の「源氏物語図屏風」(No.2-29）は「若菜上」「若菜下」のみを絵画化したものである。また、MOA美術館と東京国立博物館が所蔵する「源氏物語絵巻」(No.2-26、2-27）は、春・夏・秋・冬・賀の場面を、「初音」、「常夏」、「野分」、「御幸」、「若菜上」を選び出して一つの絵巻に仕立てたもので、四季絵の伝統を意識したと推測される。

このような従来にはない源氏絵の創作は土佐派でも見いだせる。例えば、光起筆「源氏物語初音・若菜」（東京国立博物館蔵）では、室内で繰り広げられる物語を御簾越しに覗き見るという新たな構図で描かれている。当時、源氏絵は土佐派や狩野派をはじめ（注10)、多くの絵師が手掛けていた。そのため、四季を主題とした具慶の源氏絵や御簾越しに描く光起の源氏絵も、巷に多く流布する源氏絵との差違化をはかったものと推測される。

また、如慶・具慶の歌絵には独立した歌仙絵が確認されると先述したが、『源氏物語』においても、一場面を掛幅（対幅）に描いた如慶の作品「源氏物語絵」(No.1-27）や、具慶の作品「源氏物語

朧月夜の君図」（No.2-30）が認められる。後者は、源氏物語「花の宴」の主人公朧月夜が秋の野に佇む姿とその和歌が配された作品である。物語のワンシーンを描いたというより、朧月夜が詠んだ和歌「うき身世にやかてきえなはたつねても草のはらをはとはしとやおもふ」がそのまま絵画化された作品である。『源氏物語』を題材としながら、歌絵として独立させた希有な作品例である。

源氏物語絵と同じように、同派で少なからず制作されたのが伊勢物語絵である。如慶の作品としては東京国立博物館本（No.1-30）と大英博物館本（No.1-31）の２件が現存している。詳細については後述するが、東京国立博物館本は、如慶法橋時代（1633-1670）の代表作で、全125段の文章を詞書とし、80場面が絵画化されている。

具慶の場合も、大阪青山歴史文学博物館蔵本（No.2-31）と個人蔵本（No.2-32）の２件が現存している。これらの作品も具慶の源氏物語絵同様、全段を網羅したのではなく、ある段落を部分的に抽出したものである。

『源氏物語』や『伊勢物語』は、後水尾院を中心としたサロンで盛んに講釈され、院自ら注釈書を手掛けていた。宮中において、古典物語はいつの時代でも愛好されたが、御所伝授が形成された後水尾院の歌壇では、歌道を極めるために、古典文学を修めることは必要不可欠であった。実際、御所伝授を受ける際は、古今和歌集だけに限らず、『詠歌大概』などの歌論書、『伊勢物語』や『源氏物語』などの古典、近世以降は教訓的にも読まれた徒然草（注11）などが、和歌の詠作指導とともに総合的な歌道教育として教えられていた（注12）。江戸時代初期に『源氏物語』や『伊勢物語』などが画題として多く取り上げられるのは宮中における熱心な古典学習に起因し、時を経ずして、新たな王朝文化の享受者である将軍家や大名家に愛好されたことがその一因と推測される。

また、先に記したように、これら宮廷文化を象徴する歌絵や物語絵（後には『徒然草』等も）は、将軍家や大名家の輿入れ道具として供されることも多かった。「住吉家鑑定控」に記事が掲載されている如慶筆「(源氏押絵畫屏風)」（NO.1-28）は松平越中守が所蔵していたと伝わっており、具慶筆「源氏物語絵巻」（No.2-24）も仙台伊達家旧蔵本であることがわかっている。また、『伊勢物語』全巻が揃う如慶筆「伊勢物語絵巻」（No.1-30）も徳川家綱高厳院の御遺物であったことが確認されており、もともとは輿入道具など公儀に供される目的で制作されたと考えられる。

２－２）　物語絵―軍記物―

現存作品は少ないが、売立目録や、『通航一覧』などの記事に確認できる画題を含めると、如慶作品の中で軍記物の占める割合は高い。現存する作品としては、「堀河殿夜討絵巻」（No. 1-32）や「木曽物語絵巻」（No.1-33）があり、売立目録の画像とその下絵が遺るものに「曽我物語絵巻」（No.1-34）が確認できる。また、『通航一覧』の記事に見出される作品として「(碁盤忠信図屏風)」（No.1-37）、「(那須与一図屏風)」（No.1-38）、「(和田合戦図屏風)」（No.1-39）なども確認され、東京芸術大学所蔵の住吉家粉本類には如慶の次男廣夏（鶴州　1650－1731）が写し

たという如慶筆「平家物語図屏風（写）」（No.1-35）も遺っている。その画題のほとんどは、『平家物語』、『源平盛衰記』、『吾妻鑑』などを取材した軍記物である。これら軍記物は、近世の土佐派では数が少なく、土佐光吉筆「曽我物語図屏風」（渡邊美術館蔵）など数例しか確認できない。

『通航一覧』に掲載されていた如慶の軍記物の作品は、明暦元年（1655）徳川家綱の4代将軍襲職祝賀のために来日した朝鮮通信史のために調製されたものである（第六回贈朝屏風）（注13）。この時、制作された屏風絵は六曲屏風二十双分であったが、この内、軍記物（武者絵）は狩野安信筆「梶原弓ながし　一双」と狩野隼人春雪筆「義助三井寺合戦」、勝田沖之丞竹翁筆「吉野軍」、同「篠原合戦」、そして上記した如慶の三作品である。このように見ると、狩野派に交じって、新興の流派である如慶が幕府の公務を手掛けていることも異例であるが、土佐派出身の絵師が武者絵を一番多く手掛けていたことも注目される。なぜなら、武者絵の画料は他と比べて高価であったからである。

例えば、正徳元年（1711）の贈答屏風に関する記録「御絵本途扣」（『東洋美術大観　五』所収）に掲載された画料は以下の通りである。

朝鮮人御屏風本途

一、武者絵壹双ニ付、犬追物之類共、　　銀四貫目

一、大井川御幸壹双二付、安楽寺共、　　銀三貫六百目

一、名所、源氏物語類壹双二付、　　銀貳貫三百目

一、鵜道、猿廻シ壹双ニ付　　銀貳貫目

一、花鳥之類壹双二付、　　銀壹貫百目

正徳年中朝鮮来人来朝之節相極ル

この記録は、如慶が制作に携わった明暦元年（1655）から56年を経ているため、金額自体は変更しているが、武者絵に対する総体的評価はさほど変化していないと推測される。そうであれば、贈朝屏風作成という大役の中でも、武者絵制作は特に重要な位置を占めていたと考えられる。現存する如慶筆軍記物絵巻（No.1-32、No-1-33）などの躍動感あふれる描写を見ても、如慶がいかに武者絵に秀でていたのかが容易に推測されよう。

なお、この時代は、版本の刊行などによって軍記物の享受層が急激に拡大した時期でもある。『太平記』を例に挙げると、現在確認できるだけでも、古活字本が慶長から慶安年間までに9回、整版本が元和から寛文年間まで6回刊行されている（注14）。さらに、享受者により読みやすく、理解しやすくするために、軍記物のかな付訓本も続々と刊行されていた。『太平記』は元和8年（1622）に、『平治物語』は寛永元年（1624）に、『曽我物語』は宝永4年（1707）に、『義経記』は寛永10年（1670）に最初の仮名付き訓本が刊行されている。如慶が軍記物を多く手掛けたのも、活字本の刊行等によって享受層が拡大していたことを意識したからではないだろうか。

具慶の場合、縁起絵などのワンシーンに合戦の場面が描かれることはあるが、これを主題とした作品を見出すことはできない。

2－3）物語絵－御伽草子－

住吉如慶、具慶父子の作品で、これまであまり注目されてこなかったのが御伽草子を題材とした作品である。同派が分派した土佐派では、広周筆「天稚彦草子絵巻」（西ベルリン国立美術館東洋館）、伝光信筆「狐草子」（フォッグ美術館）、光信筆「硯破草子絵巻」（個人蔵）等の御伽草子が有名であるが、光元以降の近世の絵師においては、その作品例をほとんど見ない。住吉派の場合、ことに如慶が手掛けたと推測される作品は多く、現存する作品として「宇治橋姫物語絵巻」（東京国立博物館蔵　No.1-43）、如慶・具慶作と伝える「竹取物語絵巻」（伝如慶・具慶　No.1-42・No.2-33）や「狭衣物語絵」（伝如慶　No.1-44、「（同）下絵」（No.1-45）、「きりぎりす物語絵巻」（No.1-46）などがある。また、下絵として「彦火々出見尊絵巻」（No.1-47）が、『倭錦』の記事でとして「（廿四考巻物）」（No.1-48）、「（奈世竹物語）」（No.1-49）、「（天若彦草子）」（No.1-50）、「（夢物語）」（No.1-51）が確認される。

竹取物語は、10世紀半ばまでに完成した物語であるが、慶長から元和期にかけても出版物として刊行された物語である（注15）。また、奈良絵本としての竹取物語も数点現存しているため（注16）、物語はもとより、その図様も広く流布していたと推測される。

同じような状況は他にもあてはまる。狭衣物語は、平安時代末期に成立したとされているが、鎌倉時代以降、写本が繰り返され、江戸時代初期には膨大な数の版本が刊行されている。室町時代にはすでに奈良絵本「狭衣」として制作されており、土佐派の絵師が手掛けたとされる作品も数点確認できる（注17）。廿四考図も同様で、画題としては狩野派をはじめ多くの絵師が手掛けていたが、御伽草子としても流布した画題であった。

「きりぎりす物語」の場合、古典物語の継承というわけではなく、御伽草子の異類物やその影響下につくられた物語とされ、数点の写本が遺る（注18）。この物語では、蝉や玉虫、きりぎりす等が登場し、成就した恋と、悲恋とが描かれている（注19）。「虫妹背山物語」（江戸時代）とも内容が近い。

奇瑞譚である宇治橋姫物語は、『屋台本平家物語』、『太平記』、『橋姫物語』にその名が見られ、謡曲にもなっている。能「鉄輪」も橋姫を題材としているため、物語自体は広く知られていたと考えられる。

このように、如慶が手掛けた御伽草子は、当時、版本類や奈良絵本として流布していたことが指摘できる。これも、近世の土佐派や狩野派などではあまり確認できない画題といえよう。

これらの中でも注目しておきたいのが「彦火々出見尊絵巻 下絵」（No.1-47）である。この画題は、もともと『古事記』や『日本書記』に基づくもので、浦島子伝説と同一の源から生まれたと考えられる。浦島子（浦島太郎）は寛永年間（1624-1644）以降、版本として多数刊行されており（注20）、奈良絵本の題材にもなっている。しかしながら、如慶の下絵は、これら浦島子より、伝常磐光長作品の模本（徳川家光に献上された狩野種泰が模写）の物語に近く、彦火々出見尊とその兄火闌降命が、王朝風俗である点、竜宮の登場人物が唐装束である点なども共通している。ただ

し、如慶の下絵では龍が登場する画面が挿入されているが、狩野種泰模本には見られない。よって如慶が新たに図様や構図を試作したとも考えられる。

この他、『倭錦』に掲載された作品として「(奈与竹物語)」(No.1-49)「(天若彦草子)」(No.1-50)がある。これらには各々先行する有名な作品が存在する（「奈与竹物語」金刀比羅宮蔵・「天若彦草子」ベルリン美術館蔵)。『倭錦』の中ではその作者を土佐行廣に想定しており、土佐派や住吉派の中でも、古くから名の知れた作品であったと推測される。なお、「(夢物語)」の内容や成り立ちについての詳細は現在のところわかっていない。

具慶も如慶同様、いくつかの御伽草子を手掛けている。先に紹介した「竹取物語絵巻」や「橋姫物語絵巻」(No.2-34) は具慶作と伝えられる作品である。また、「梅津長者物語絵巻（写)」(No.2-35) は、具慶の原本を文政２年（1819）に模写したものである。筆者は不明であるが、東京国立博物館にも同派による「梅津長者物語絵巻」の画稿が遺されている。

２－４）　物語絵－説話・随筆－

住吉如慶・具慶父子が手掛けた説話絵としては、宇治拾遺物語絵が挙げられる。当時、この画題は受容が高かったとみえ、狩野探幽・尚信・安信の合作「宇治拾遺物語絵巻」(陽明文庫蔵) も存在する。

住吉派の場合、具慶の「宇治拾遺物語絵巻」(No.2-37) が有名である。本絵巻は、同物語・巻15の４「門部府生海賊射かへす事」の段のみを絵画化したもので、表装に修理の痕跡が見出せないこと、また、『考古画譜』巻３（明治18年・1895）にも「門部府生物語　一巻」とあることより、制作当初より本段のみで完結していた可能性が高い。先に記した『源氏物語』や『伊勢物語』にもあてはまるが、具慶の場合、物語性の高い段に焦点をあてて絵画化する傾向が見られる。

『倭錦』によれば、本画題は如慶も手掛けていたようである (No.1-52)。しかしながら、制作年代はもとより、その構成についても不明である。

次に注目したいのが、如慶・具慶父子における徒然草図の制作である。同画題は、江戸時代初期において、特に流行した画題であった。アカデミックな流派はもとより、奈良絵本にも数多く見出すことができる。『徒然草』自体、成立から時を経ずして当時の歌人や貴族、僧侶などを中心に愛読されてきたが、その享受層が急激な拡がりを見せたのはこの時期からである。『徒然草』の活字本が次々に出版され (注21)、各種の徒然草図はもとより、兼好法師像 (注22) 等も制作されている。また、慶長年間（1596 － 1615）には、中院通勝（1556 － 1619）や藤原惺窩（1561 － 1619)、林羅山らによって輪講や講釈が行われ、同９年（1604）に出版された秦宗巴著『徒然草寿命院抄』を嚆矢に、同書の注釈書も多数刊行されている (注23)。北村季吟 (注24) によって著された『拾穂抄』は徳川綱吉に献上するため編まれたことが確認されており、当時、流行していた古典解釈学は将軍家まで広がっていたことがわかる。

同派に限らず、徒然草図は江戸時代を通じて数多く制作されている。『徒然草』は儒教を基盤とする徳川幕府の啓蒙教化政策の中で、教訓あるいは修身の書として見なされていた。徒然草図

が大名家などの輿入れ道具として制作されたのはここに起因していると考えられる。

如慶・具慶父子の場合、特にこの画題を得意としていた。『倭錦』の如慶の項には「一　徒然草数々」と、具慶の項にも「一　徒然草大色帋数有」とあり、徒然草図制作は同派における制作活動の中でも重要な位置を占めていたと考えられる。

残念ながら、如慶に関しては、伝如慶筆「徒然草図」の模写（No.1-53）や、同じく伝如慶筆「徒然草図屏風」（No.1-54）しか確認できない。

これに対し、具慶の場合、現存作品が下絵を含めて6件（No.2-38 ～ No.2-43）存在している。中でも、古くから知られているのが東博本（No.2-38）であり、飛鳥井雅章（1611 － 1679）の孫娘清姫（？～ 1711）が延宝6年（1678）に福井藩主松平綱昌（1661 ～ 1699）のもとへ嫁いだ際、輿入れ道具として制作されたことが松原茂氏によって確認されている。また、具慶の手掛けた作品には、『徒然草』のある一段から抜粋して絵画化した作品が3件（No.2-39 ～ No.2-41）残っているが、これらが『倭錦』の「一　徒然草大色帋数有」を指すものと考えられる。その下絵と推測されるのが斎宮歴史博物館が所蔵する「徒然草図下絵」（No.2-42）である。これらは、現在、マクリの状態で９６葉残っているが、画面形式や図様の一致より具慶筆「徒然草図」（No.2-39）、「(同)」（No.2-40）、「(同)」（No.2-41）の直接的あるいは間接的な底本であると推測される。また、その図様の源泉となったのは、当時、刊行された徒然草の注釈書である『なぐさみ草』（松永貞徳著　跋文・慶安5年〔1652〕）などの挿絵や、同じく注釈書である『徒然草寿命院抄』（秦宗巴著　慶長9年〔1604〕）や『野槌』（元和7年〔1621〕）の本文（説明部分）であることを拙稿「住吉具慶の徒然草図制作について－斎宮歴史博物館蔵〔徒然草図下絵〕を中心に－」で確認した(注25)。当時、このような古典注釈書は、徒然草に限らず、和歌関連はもとより源氏や伊勢などの古典物語でも盛んに刊行されていた。本下絵の存在は、具慶がやまと絵的画題の作品を手掛けた際、注釈書にも目配りをしていたことを示している。

3　花鳥・景物図

光起以降の土佐派が鶉図を中心とした多くの花鳥画を手掛けたのに比べ、如慶の花鳥画として確認できる作品はあまり遺っていない。

No.1-57 から No.1-60 までは、皇室や臨済宗寺院の建造物を装飾した杉戸絵等であるが、これらが如慶作であるかどうかは未だ不明である。

また、No.1-61 から No.1-63 までは、「禁中御絵画工記」の記事に掲載されたもので、寛永・承応度における御所造営の画事である。寛永度の記事によれば、如慶は「西より二の間」に「絵まりの図」を、承応度の記事によれば、「内侍所十二帖処」に「梅」を、「御学問所南ノ方西」に「高欄ニ菊　裏根篠」を手掛けていたことが確認できる。

No.1-56 の「秋草図屏風」は、画面全体に菊や薄といった秋草を配したものである。伝統的なやまと絵の景物画では、和歌の歌枕や歌意を象徴する図様、あるいは物語の一場面を描いた作品

が多いが、本図の場合、その原典と推測される文学的背景を見出すことは難しい。このような傾向は、狩野派など漢画系の流派はもちろんのこと、江戸時代に入るとやまと絵系でも顕著になる。

具慶の場合、青蓮院の杉戸絵「松図」（No.2-46）が具慶作として伝わる。また、光起以降の土佐派が得意としていた「鶉図」（No.2-45）も確認されている。

如慶の景物図としては「四季山水図座屏」（No.1-55）が挙げられるが、本作品は、墨畫に淡彩が施されており、構図も画面右下あるいは左下に景物をまとめて描く漢画風の山水図である。しかしながら、春は山里に桜や卯の花が咲き乱れ、農夫が牛で田を耕す等の四季の景物が描かれ、歌絵からの影響を想起させる。

具慶の場合、「都鄙図巻」や「洛中洛外図」、「田園風俗図屏風」などでも景物図的要素を含んでいるが、本論では、当世風俗を活写したこれらの作品を風俗画とみなした。そうなると、具慶の景物図はほとんど存在していない。

4　行事絵

住吉如慶の手掛けた行事絵については「年中行事図屏風」（No.1-64）が挙げられる。しかしながら、同派の手掛けた行事絵としとして特に注目すべきは、如慶が模写した「年中行事絵巻」（個人蔵）である（注26）。この模写本は、治承年間に後白河上皇が制作させた年中行事絵巻を、住吉家の重宝とし、朝廷の御用に役立つよう、後水尾院の命で如慶に模写させたことが奥書（注27）よりわかっている。後水尾院は禁中における学問の強化と同様、公儀の復活にも力を注いでいた。院は、長禄年間（1457 － 1460）頃より途絶えていた後七日御修法などを再興し、『當時年中行事』のような朝儀に関する著作も手掛けている（注28）。如慶による年中行事絵巻の模写も後水尾院による公儀の復興の一環として行われた重要な画事であったと推測できる。「年中行事図屏風」（No.1-64）については、右隻に正月一八日に行われる賭弓が、左隻に正月二一日に行われる内宴が描かれたものである。模写本との関係については未だ明らかではない。また、『倭錦』の中でしか確認できないが、如慶は「承安五節会」も手掛けていたようである。

具慶の行事絵については、現在、確認されていないが、『禁裏御賄頭日記抄書』延宝８年（1680）11月18日の條に、具慶が年中行事の写しと「五節之宴水屏風」（No.2-47）を依頼され、天和元年（1682）２月16日に年中行事絵139枚が出来上がり、納められたとの記事が掲載されている。この年中行事絵と父如慶が模写したものとが同一であるかは不明であるが、父同様、具慶も宮中の行事絵を手掛けていたことがわかる。

5　小括

以上、住吉如慶・具慶父子のやまと絵的画題の作品を概観してきた。これらの多くは、同派が土佐派から分派して独立したという経緯を反映し、従来からのやまと絵的画題である歌絵や物語絵、行事絵などが大部分を占めていた。三十六歌仙や百人一首などの揃いの歌仙絵、『源氏物語』

や『伊勢物語』などの古典物語については、江戸時代初期に禁中で興った王朝文化復興の気運が、やがて将軍家や大名家にも伝搬したことを反映し、大名家の輿入れ道具に供されることが多かった。これらの画題は、土佐派や狩野派でも手掛けられていたが、具慶の場合、四季絵の伝統を踏まえた作品や、和歌に基く新たな源氏絵を創作するなど、他流派との差異化をはかっていた。また、如慶の歌絵では、当世に成立した武家歌仙の類や蟲歌合など、全く新しい画題も積極的に取り上げられていた。

さらに、同派の歌仙絵で目を引いたのが独立した歌仙絵の存在である。かれらが手掛けたのは、柿本人麿や小野小町、在原業平などの代表的な歌人だけでなく、赤染衛門や小侍従なども含まれており、その画風も定形化を脱却した実人物的描写で、物語の一場面のような構図がとられていた。

軍記物の作品は、特に如慶に多く見いだすことができた。如慶は第6回贈朝屏風制作でも狩野派と並んで武者絵屏風を手がけており、これらの制作に定評があったのではないかと推測される。なお、軍記物は、当時、各種出版物の刊行などによって、享受層が急激に拡大したと考えられる。このような状況は御伽草子にもあてはまり、特に慶長年間（1596-1615）から元和年間（1615-1624）にかけては、これらの刊行物が流布し、奈良絵本も大量に生産されている。同派、特に初代の如慶はこれらを多く手がけているが、新興の流派であるがゆえに、このような動向にもいち早く対応したと考えられる。

『宇治拾遺物語』や『徒然草』といった説話・随筆が数多く絵画化されたのも、この時代の特徴であろう。住吉如慶・具慶の場合も、徒然草図を多く手掛けていた。これらは修身の書として、歌仙絵や古典物語と同様、大名家の輿入道具に供されることも多く、如慶・具慶父子の作品もこれらの依頼を受けて制作されたと推測される。

これとは逆に、従来からのやまと絵的画題でありながら、さほど着手されなかったのが花鳥図・景物画であった。また、現存する作品からも、従来のような文学的背景を読み取ることは困難であった。

このように、住吉派のやまと絵では、伝統を保持しながら、同一画題の中で新しい構成や図様を模索したり、当時、成立したばかりの画題が新たに取り入れられていた。狩野派や土佐派が画壇において確固たる地位を築いていた中、新興流派に残された道は、従来の画題の再構成や、軍記物や御伽草紙といった新たな画題への着手であろう。これらは現存する作品数が多くないため、これまでほとんど指摘されてこなかった。

本論では住吉如慶、具慶父子のやまと絵的画題を中心に考察を加えてきたが、一方、かれらが活動した江戸時代初期の伝統文学の在り方に目を向けると、堂上人を中心とした中世以来の伝統を守る流れと、地下人が中心となった近世的新たな流れとが混在する時期でもあった（注29）。伝統を守る流れは、後水尾院によって完成された御所伝授に象徴され、そこでは歌道や古典文学は依然として師資相承の秘伝により教授されていた。これに対し、新たな流れとしては、近世初期

の版本の発展が後押しとなり、『伊勢物語』や『源氏物語』まで出版物として刊行され、これらを理解するための公開講義も開催された。さらに、伝統を引き継ぐことに否定的な動きも見られるようになる。その代表が「蟲歌合」の原作者である木下長嘯子であることは先述の通りである。このような流れは、住吉如慶・具慶父子のやまと絵制作にも少なからず影響を与えていたと推測される。

最後に、本論を考察するにあたり、可能な限り住吉如慶・具慶父子の作品を集めたつもりであるが遺漏も多いと考えられる。また、最初にお断りした通り、画題の傾向を探るために、現存作品に限らず、売立目録に掲載された画像や、画論書などの記事も参考にした。現存作品でも全てを確認したわけではなく、また、売立目録によって確認できる画像も不鮮明であるため、作者についての判断も的確とはいえない。その点は、反省点として、今後も引き続き検討を続けていく予定である。また、不適切な判断や表記にお気付きの際は、是非ともご教示いただきたい。

注

注1　榊原悟「住吉具慶研究ノート　延宝七年『元三大師縁起絵』制作をめぐって」（『古美術』73　三彩社　1985年1月）、拙稿「住吉派興隆と天台宗との関係について」（『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編　第59巻　2008年3月）

注2　拙稿「江戸時代初期における王朝文化復興と住吉派興隆との関係について―後水尾院と住吉如慶を中心に―」（『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学篇　第58巻　平成19年2月）

注3　『古画備考』三十四　住吉家の項
　慶賀廣通、具慶門人、蜂谷氏、（後略）
　慶琢慶茂、具慶高弟松原氏、池田氏、池田山城守家来（後略）
　戸田廣重、称二源兵衛一具慶門人

注4　松原茂「王朝絵画の伝統と変容」（「やまと絵－雅の系譜－」展図録　東京国立博物館　平成5年10月）

注5　「元禄繚乱」展図録（NHK　NHKプロモーション　1999年）の作品解説を参考にした。

注6　拙稿「住吉具慶筆〔柿本人麿像〕についての一考察―近世初期宮廷歌壇と歌仙絵制作―」（『美術史を愉しむ―多彩な視点―』　思文閣出版　1996年5月）

注7　森暢「蟲歌合繪」（『国華』1043号　昭和56年6月　国華社）参照。

注8　注7の森暢「蟲歌合繪」では、古活字本（丹緑本　東洋文庫蔵）、小整版本（赤木文庫蔵）、享保四年本（架蔵）、藪本家蔵本A・Bが挙げられている。

注9　拙稿「元禄期における定家詠月次花鳥歌絵についての考察－光起本、探幽本、具慶本を中心とした比較」（『美術史』第146冊　平成11年3月）

注10〔土佐派－光起－の源氏絵〕
「源氏物語　初音・若菜図屏風」（東京国立博物館）・「源氏物語図屏風」（福岡市美術館）・「源氏物語絵巻」（大阪青山短期大学）・「源氏物語　槿図」（根津美術館）・「源氏物語　明石図」（個人蔵）・「源氏物語　若紫・薄雲図屏風」（個人蔵）等
〔狩野派－探幽－の源氏絵〕
「源氏物語図　賢木・澪標図屏風」（出光美術館）・「源氏物語図屏風」（宮内庁三の丸尚蔵館）等

注11　島内祐子「徒然草注釈書の世界―近世以降―」（『国文学　解釈と鑑賞』　第62巻11号　1997年3月）を参考にした。

注12　小高道子「古典の継承と再生」（『岩波講座　日本文学史　変革期の文学Ⅱ』第7巻　1996年1月）を参考にした。

注 13　榊原悟『美の架け橋　異国に遣わされた屏風たち』（榊原悟　ぺりかん社　2002 年 7 月）を参考にした。
注 14　長友千代治「商業出版の開始」（『岩波講座　日本文学史　変革期の文学Ⅱ』第 7 巻　1996 年 1 月）を参考にした。
注 15　慶長古活字版、慶長元和古活字版、元和寛永古活字版等
注 16「竹とり」（江戸時代前期　縦本三冊　各冊五面に挿絵有り）『奈良絵本　下』（工藤早弓　紫紅社文庫　2006 年 10 月）所収　ほか。
注 17　伝土佐光顕筆「狭衣物語」残欠、土佐光則筆「狭衣物語画帖」（個人蔵か）、伝土佐光秀画・狩野養信、永信模写（東京国立博物館蔵）など。
注 18　実践女子大蔵、個人蔵（大永年間・1521-1528 写し）の写本がある。
注 19　以下、「特別展　アニマルランド　東アジアの美術に見る動物表現」展図録（和泉市久保惣記念美術館　2005 年 10 月）の作品解説を参考にした。
注 20　寛永頃無刊記丹緑本　等（松本隆信「伝本から見た御伽草子二十三篇について」『日本文学研究資料叢書　お伽草子』有精堂出版　昭和 60 年 6 月を参考にした）。
注 21「研究書誌〔一徒然草の本文関係のもの〕」（『増補　国語国文学研究史大成 6　枕草子　徒然草』　三省堂　昭和 52 年 10 月）を参考にした。
注 22　狩野探幽筆「兼好法師画像」（神奈川県立金沢文庫蔵）等。
注 23　注 11 の島内祐子「徒然草注釈書の世界―近世以降―」を参考にした。
注 24　北村季吟（1624-1705）は古典注釈者であり歌人でもある。季吟は具慶が幕府の御用絵師に就任した貞享 2 年（1685）に幕府の歌学方に就任している。具慶とに関係については、具慶が源氏物語絵制作を依頼された際、その注釈書を季吟に頼んだとの記事や、玉津島神社の宮司となった季吟へ具慶が神影を写し、和歌とともに送ったとの記事が『古画備考』に見いだせる。また、具慶筆「伊勢物語絵巻」（No.2-32）は、詞書を季吟が手掛けており、両者は公私に渡り深く交友していたことがわかる。
注 25　拙稿「住吉具慶の徒然草図制作について―斎宮歴史博物館蔵〔徒然草図下絵〕を中心に―」（『デ　アルテ』22 号　九州藝術学会　2006 年 3 月）
注 26　オリジナル作品（「年中行事絵巻」）の模写であるため、如慶作品として表 1 には掲載していない。
注 27　所々言葉者雅経卿
絵者光長
年中行事拾六巻者
仙洞院様為勅定一家
重寶可成者之
又者朝庭之御用二可立思召
由池尻宮内卿殿為奉拝借寫所也
誠至子々孫々堅有義不如之此筆
風以可為一流鑑必少時不可他見者也
注 28　詳細については、注 2 の拙稿「江戸時代初期における王朝文化復興と住吉派興隆との関係について―後水尾院と住吉如慶を中心に―」をご参照いただきたい。
注 29　以下、注 13 の小高道子「古典の継承と再生」を参考にした。